

## 【書評】

### John Dennis Chasse, *A Worker's Economist: John R. Commons and His Legacy from Progressivism to the War on Poverty*

London and New York: Routledge, 2017, x + 317 pp.

本書は、ジョン・ロジャース・コモنز (1862-1945) の伝記である。著者のジョン・デニス・シャッセはニューヨーク州立大学(ブロックポート校)を退職している人物で、これまでにコモنزに関する論文を複数執筆している。

コモنزの伝記は、本人が晩年に執筆した *Myself* (1934) と、ラファイエット・ハーターの著作 *John R. Commons: His Assault on Laissez-faire* (1962) がある。コモنزの *Myself* は、彼自身が「年代順には書かない」と宣言しているとおり、話があちこちに飛んでしまう時がある。著者も、*Myself* は「回想録と呼んだ方がよいかもしれない」(219)と述べており、読み物としては面白いのだが、整理された伝記とは言い難い。それに対してハーターの著作は、著者曰く、他者による「唯一のコモنزの伝記」なのだが、「彼は1962年以後に歴史家が執筆した著作にアクセスできなかった」(3)。

したがって、本書の大きな特徴としてまず挙げられるのは、ハーターの著作以後の資料や研究成果が取り入れられている点である。例えば、リチャード・ゴンスがコモنزの「偉大な5年間(1899-1904)」やウェット夫妻からの影響を述べた論文(2002)を本文で取り上げていたり(92)、ラムスタッドとスターキーがコモنزの『人種と移民』(1905)からコモنزを「人種差別主義者」だと断じた論文(1995)について、その解釈を批判したりしている(122)点などが挙げられる。

本書は、まえがきとイントロダクションに

始まり18章に及ぶ伝記部分と3つの付録、さらに年譜等から構成されている。伝記部分は、コモنزの両親の結婚から彼の死後まで、年代順に並べられている。各章の分量は異なるものの、概ね1章10-15ページほどで書かれているので、リズムよく読み進めることができるのだが、その内容は長い年月をかけた綿密な調査に基づいている。この点が、本書の最大の特徴である。とくにタイトルが *A Worker's Economist* とあるように、著者はコモنزの労働史家または労働立法の立案者としての功績を高く評価している。

ここでコモنزの生涯を3つのパートに分けて概説しておこう。第1は、オハイオ州での誕生からオバーリン大学を卒業し、ジョンズ・ホプキンス大学院でイーリーに師事したが、学位を取得できないまま教師生活を送る時期(1862-1899)である。

第2は本人が「偉大な5年間」と呼ぶ時期(1899-1904)で、この時期にアメリカ経済調査局(ABER)で物価調査、合衆国産業委員会(USIC)で労働組合調査と移民調査、全米市民連盟(NCF)で労使交渉に携わる。

そして第3がイーリーに招かれて着任したウィスコンシン大学時代(1904-1932)である。この時期は学外活動の面では、進歩主義的なウィスコンシン州知事ラフォレットの政策ブレーンとして活躍し、1932年にアメリカで最初の失業保険法の成立に貢献した他、ウィスコンシン産業委員会(1911-13)、合衆国産業関係委員会(USCIR: 1913-15)で委員を務めている。

一方、研究面では労働史研究において全10巻におよぶ『アメリカ産業社会資料史』(1910-11)、全4巻の『合衆国労働史』(1918-35)に携わり、労働史研究における「ウイスコンシン学派」を形成していく。そして制度派経済学者として『資本主義の法律的基础』(1924)と『制度経済学』(1934)を執筆した時期である。

著者がとくに丁寧に調査しているのは、このうちの第2パートと第3パートの失業保険法成立に至る過程、ならびに労働史研究の部分である。とりわけ興味深かったのは、コモنزの教え子たちの活動を詳しく調査している点である。

コモنزはウイスコンシン大学時代、毎週金曜の晩に教え子を自宅に招いていた。そこで雑談をしたり、研究報告をさせたりしていたのだが、その教え子たちを「フライデー・ナイターズ」と名付けていた。このフライデー・ナイターズには、後のアメリカ経済学会会長となる教え子が6人もいた(7)。そのなかには、後にアメリカン・ケインジアンとして活躍するアルヴィン・ハンセンや後のノーベル経済学賞を受賞するセオドア・シュルツも含まれていた。

加えて本書は、コモنزの死後、彼の教え子たちが第二次世界大戦後の民主党政権へ与えた影響までフォローしている。具体的には、フライデー・ナイターズの一員で、アメリカにおける福祉国家の構築に多大な貢献をして「ミスター社会保障」と呼ばれたウィルバー・コーエンが、ケネディ政権で保健教育福祉省の次官補、ジョンソン政権で同長官として活躍したことなどが紹介されている(240-42)。

著者は「『労働法原理』がコモنزの最も成功した著作であったかもしれない」(155)

と述べるのだが、「『労働法原理』はたいてい無視されている。コモنزの思想に興味がある学者は一般的に『資本主義の法律的基础』、『制度経済学』、そしておそらく *Myself* に多くの注意を払う。しかし、『労働法原理』が、おそらくコモنزの教え子に最も顕著な影響を及ぼした」(219)と述べ、『労働法原理』の重要性を強調しているのが、著者のコモنز研究のスタンスを示している点で印象的である。

それゆえ、『制度経済学』の理論的背景に関心がある評者としては、付録の3番目にある『制度経済学』の概要(273-80)は不十分に感じた。また、コモنزはアーヴィング・フィッシャーと手紙のやり取りをしていた時期もあるのだが、この点についての調査も、労使関係の調査と比べると物足りなく感じた。

以上のような不満はあるものの、コモنزを理解するうえでの伝記の重要性は強調してもしすぎることはない。ハーターも指摘しているように、コモنزの著作を読みにくくしているのは、「彼の特異な経歴やその影響」であり、これをもとに彼独自の用語が生み出されているからである。よって、コモنز独自のキーワードが生まれる背景を知るためにも、伝記の理解は不可欠であり、本書はその意味でコモنز研究に大きな功績を残すものだと見える。

最後に、評者は2018年1月のアメリカ進歩経済学会(AFEE)において著者の報告を偶然聞いたが、83歳(当時)という著者の年齢に驚くとともに、コモنز研究を踏まえた現代の労働組合について、活気に満ちた報告をしている姿に感銘を受けた。

(高橋真悟：東京交通短期大学)